

# 声に出すことを楽しむ子どもの育成

## ～自ら気づき、考え、表現することができる子どもを目指して～

妙高市立斐太南小学校 宮崎 栄子

### 1 目指す子どもの姿

校舎中から、大きな声で読む音読の声が響く。しっかりとした口調で抑揚をつけて、間をとって音読している声である。ほぼ全員がしっかりとした音読ができるように見える。しかし、一人一人に目を向けてみると漢字が読めずにつかえていたり、言葉を理解するまでに時間がかかりすらすらと読むことができなかつたりして、苦手意識を感じている児童もいる。1学期末にとった児童アンケートでは、19名中「音読が好き」な児童は8名、「音読が少し好き」は10名、「あまり好きではない」は1名、「きらい」は0名という結果であった。「あまり音読が好きではない」と感じている児童は、声に出すことに自信がもてず、楽しいと感じる場がほとんどもてなかったのではないかと考える。つかえずに読むことができなかつたり声がなかなか出せなかつたりする児童も楽しんで自分の思いを声に出すことができるよう「声に出すことを楽しむ児童の育成」に力を入れて取り組む。

### 2 実践の概要

#### <授業の中で育てる>

(1) 単元名 詩を楽しもう「われは草なり」

(2) 単元のねらい

- 自分の思いや考えが伝わるように音読するとともに、優れた叙述について、自分の考えをまとめることができる。
- 近代以降の文語調の文章について、内容の大体を知り、楽しく音読することができる。
- 比喩や反復などの表現の工夫に気づくことができる。

(3) 単元の構想

「われは草なり」は七音・五音の繰り返しによって構成された文語定型詩である。助動詞や語尾に文語的表現が見られ、「われは」「己に」など、現代の話言葉ではあまり用いられない言葉が使われている。また、対句的表現が効果的に用いられていることもこの詩の特徴の一つである。「われは草なり」の第一・二・三連では、草の生命の生きる姿を、自らの生き方への願いを込めて描き、第四連では、草のように生きることへの強い決心をうたいあげている。「われは草なり」という、自己の存在を主張する題名が各連をつなぎ、「自らも強く生きたい」という作者の思いや生きることへの作者の感動や主張を容易に読み取ることができる。単元のねらいが実現できるために以下の手立てを講じる。

① ヒントカードの活用

文章を読み取ったり、文の特徴に気付いたりするためにヒントカードを活用する。作者の思いを、自らの力で読み取ったり、詩の構成・表現上の工夫に気付かせたりすることで、より深く詩を理解し、詩の描く世界をイメージできるようになると考える。ヒントカードは、声に出して音を数えたり、書き込みをしたり、比べ読みができるようにしたりして、ただなんとなく読むのではなく、意識して読むことにより、詩の特徴に気付くようにさせる。ヒントから考え、自ら気付いたことが喜びにつながり、より楽しく音読できるようになると考えたからである。

② 声を出しやすい雰囲気づくり

詩の調子よさや声に出して読む楽しさを思う存分味わわせたいと考え、音読の形態を工夫する。みんなで声を合わせる、様々な声の出し方をする、ペアになって読む、順番に読むなどである。顔を上げて音読させ、友達の声を聞いたり顔を見たりできるように、デジタル教科書を使う。また、授業の導入では、音読トレーニングを行う。息をたくさん吸ったり声を出したりするトレーニング、口の動きをよくするトレーニングやタイミングよく声を出すトレーニングを友達と組になって行わせるなどして、楽しい雰囲気の中で音読に対する意欲を高めるようにする。

③ 小集団での話し合いの場の設定

詩を児童一人一人がどのようにとらえ、理解し、受け止めたかで音読の仕方が変わってくる。どのように音声化どうすれば自分の描いたイメージを聞き手に伝えることができるか、音読を工夫させる。この場面では、一人では声を出すことに抵抗を感じる児童もいることから、小集団を活動単位とする。集団の構成は、ほぼ同じ力をもっている児童とした。いつもリーダーの指示を待つ傾向のある児童も、この集団の中では、自ら進んで考えを言ったり、リーダーになったりしてまとめたりしていくことで積極的に授業に参加していくのではないかと考えたからである。同じ力の友達と学習を進めることで、安心感をもたせ、声を出すことが楽しいと感じるであろうと期待する。

#### (4) 授業の実際

##### ① ヒントカードの活用

詩を一度読んだだけでは詩の特徴に気付かなかった児童も、ヒントカードの指示に従い、手を打ちながら声に出して音を数えたり、書き込みをしたりする姿が見られた。ヒントカードは3枚用意した。1枚目は5・7音のリズム、2枚目は繰り返される言葉、3枚目は口語と文語の違いを読み比べるカードである。手を打った数を指で数え5音・7音の繰り返しに気付き、特徴を書き込む姿や真剣な表情から、自らの気付きに喜びを感じている様子を見とることができた。

##### ② 声を出しやすい雰囲気づくり

授業の導入で行った音読トレーニングで思いっきり声を出すことは、児童の心に安心感をもたせ、声を出すことの楽しさを感じさせた。その後の活動が円滑に進んだことから、導入時の音読トレーニングは、声を出させることに有効であることが分かった。この詩の特徴である5音・7音の繰り返しや文語調の力強さも、何度も読むことで味わうことができるようになった。また、デジタル教科書を用いて全員が顔を上げて音読することで、児童の口の動きや表情を把握しやすくなった。このことで教師が児童一人一人の頑張りを認め褒める機会が増え、児童の意欲につながった。



3人グループで読み方を工夫する

##### ③ 小集団での話し合いの場の設定

学習の定着状況がほぼ同じ3人グループで活動することにより、安心して声を出す雰囲気ができた。人任せにせず、自ら考え、自ら気付くことができたことで、自信をもって声を出す姿が見られた。どのように表現したら、作者の思いが伝わるか思いつかない児童も、小集団で話し合うことでヒントをもらい、自ら表現を工夫する姿が見られた。

### <全教育活動における音読活動・発表活動の重視>

国語の時間だけでなく、全教育活動において音読活動、発表活動を重視してきた。

- ・ 音読集を持たせ毎時間の始まりに音読タイムを設定する。
- ・ 朝や帰りの会でスピーチする場を設定する。(一日のめあて、新聞記事の紹介等)
- ・ 発表場面や自分の考えを伝える場を意図的に設定する。
- ・ 家庭学習で音読に取り組み、保護者の支援・励ましを得ながら児童を鍛える。

など、学級経営の中に音読・発表を位置付け、あらゆる教育活動の中で音読活動・発表活動に取り組んできた。この日常的な取組が児童の成就感につながり自信につながっている。また、音読朝会を毎月行い、文化祭で辻音読として発表し、日頃の成果を発表する場を意図的に設定してきた。互いの頑張りを認め合う雰囲気をつくることで、自分の意見を発表することに喜びを感じている児童が多くなった。上級生の発表を聞いて大きな声で堂々と音読する姿に憧れをもち、音読への意欲を高めて、声に出すことに喜びをもつ姿が見られるようになった。

## 3 成果と課題

### <授業の中で>

様々な取組から、人から言われるのではなく、自ら気付き、考えたことは、児童の表現しようとする意欲につながっていくことが分かった。教師は一方向的に教えるのではなく、児童自身が「自ら気付き、考える」ことができるように様々な手立てを講じていくことがいかに大切であるかということも再認識することができた。

今回の①ヒントカードの活用、②声を出しやすい雰囲気づくり、③小集団での話し合いの場の設定が「声を出すことを楽しみ子どもの育成」に有効であったということが分かった。

自ら気付き考えたことは、表現しようとする意欲につながっていたが、音読の質を高めていくには、学級児童全体での理解を深めることが必要であった。グループ活動だけでなく、学級全体で教材への理解を深め、音読の仕方を工夫することができたらよかった。学級全体としての学びを深めることを今後工夫していきたい。

### <全教育活動を通して>

音読トレーニングで口をしっかり動かして大きな声を出すことや音読集を用いて動作化やペア読み、竹の子読みなど様々な音読方法を工夫させることで、児童は楽しんで音読していくことが分かった。繰り返し声に出して読むことで、文の意味を理解し、間をとったり強弱をつけたりして感情を込めて表現することができるようになり、自信をもって表現することができた。また、文化祭や定期的に設けた朝会時での音読発表、行事ごとの感想発表など全教育活動を通して音読活動・発表活動の場の設定は、認め合い褒められることで自信が付き、声に出すことを楽しんだり喜んだりする姿へとつながった。今後も児童一人一人に様々な表現方法や理解が深まる確かな力がつくよう研鑽に努め、声に出すことを楽しむ児童の育成に励む。